

開店に先立ち、石原さんは前オーナーが開店してまだ40日しか経っていない。『もつときちゃんと準備してお店べきでした』と石原さんは苦笑する。しかし、商品の陳列を見ても、お客様とのやりとりを見ても、もう堂に入ったもの。それもそのはず、取材したのは新しいはるかぜ書店

ひきこもりの就労支援としての書店

2年前、「うわさの個性派書店」で取材したはるかぜ書店が、場所も経営方法もまったく変えて再スタートした。前オーナーから営業を引き継いだのはNPO法人アンガージュマン・よこすか。不登校やひきこもりの青少年に居場所を提供する団体だ。

はるかぜ書店は福祉関連書の専門店であると同時に、ひきこもりの青少年が就労実習を行う場所でもある。代表の小柳良さん、チーフの石原直之さんに聞いた。

石原直之 チーフスタッフ(店長) 小柳 良 代表
はるかぜ書店
所在地 神奈川県横須賀市上町2-46
(〒238-0017)
TEL/FAX 046(804)7883
Eメール harukaze@angelicsmile.com
Web http://blog.livedoor.jp/harukaze55
売場面積 16坪
営業時間 9時~19時
定休日 年末年始
駐車場 なし



1の旧店舗で2日に1日、半年間働いた。さらに開店前の1か月間は、スタッフ全員で実地練習を積んだ。

アンガージュマン・よこすかの設立は2004年の4月。不登校やひきこもりの青少年が、いつでも来られる場所を、というのがその目的だ。居場所となるフリースペースもあれば、個別の学習指導を行う場所もある。

「ひきこもりの青年たちが、社会に出たい、でもどうやって出ていいの



▲店舗外観



▲店内は明るくゆったりとしていて気持ちがいい。文庫やコミックがないので、一般的な書店とは少し雰囲気が違う

かわからない。そこで就労支援を始めました。いろんな人に話を聞いたり、会見学をしたり。いちばんいいのは、アンガージュマンのあるこ



▲店内では女性誌が圧倒的に強い。「本日発売」の表示の有無でも売れ行きが違ってくるという



▲何を面倒にするかを考えて選ぶのも、スタッフにとって楽しい経験だ



◀これから核になっていく絵本・児童書

て10分くらい。平日の昼間はお年寄りとベビーカーを押しめた女性が多いが、若い男性の姿もちらほら見かけている。京浜急行の横須賀中央駅から歩いていく。

「就労につながる方法として、たとえば農業体験があります。自然と触れることで癒していく。でも僕たちは、できるだけ人がいっぱいいるところでやつていこうと思う。人を癒

すのは人ですから。その中で傷ついたり、ほかの人に喜んでもらつたり、自分が必要とされていることを感じたりすれば、不登校の子もひきこもる子も元気になりますよ」

はるかぜ書店は、若者たちが実際に働いて、お客様や取引先と生きたコミュニケーションを体験し、社会に出ていくためのステップとなる。石原さん以外のスタッフは、インターン(研修生)として働く。

チーフ(店長)の石原さんも、元ひきこもりだった。アンガージュマ

▲店内を見通す。中央のテーブルで商品の説明をしたり、子どもが椅子に腰掛けて本を読んだりする



連載

この書店のここがスゴい!

⑧

レポーター 永江 朗

はるかぜ書店

(神奈川県横須賀市)

福祉関連書専門店が就労支援の場に発展。「街の本屋」だからできることとは?



▲メインとも言える福祉、精神医療などの棚。

かなり専門性の高い本が多い

さすがに不登校やひきこもりに
関する本は、充実している